志平・長塚・地獄沢遺跡
発掘調査報告書

（概　報）

平成５年度榎垣外遺跡ほか発掘調査報告書

長野県岡谷市教育委員会

序

平成５年度の榎垣外遺跡ほか、岡谷市内遺跡の発掘調査及び試掘・確認発掘調査の報告書（概報）を刊行することになりました。

本年も、遺跡内の土木工事が数多く申請されましたがこれらにつきましては試掘調査などの対応を行い、本年度の調査件数は20件にのぼりました。

今年度の調査では、地獄沢遺跡から縄文時代中期の住居跡１棟と小竪穴155基が発見され、志平遺跡においては縄文時代中期住居跡17棟、弥生時代住居跡２棟、平安時代住居跡２棟、縄文時代小竪穴11基、そして長塚遺跡から縄文時代住居跡１棟が発見されるなど、多くの貴重な遺構、遺物が発掘されました。

毎年、多くの個人住宅建設などの小規模開発が行われております。これらは少面積ではありますが、発掘調査を積み重ねて、調査資料を蓄積することにより、やがて遺跡全体の性格を把握し、原始・古代の岡谷市の歴史を明らかにする資料となることでしょう。

今後、この報告書が学術文化の向上に活用されることを願っております。

今年度の調査にあたり、土地所有者各位、工事関係者の方々、そして調査地に隣接した多くの皆様のご好意、ご協力にお礼申し上げます。また、発掘調査に携わっていただいた皆さんには、炎暑、厳寒の中を御苦労いただき感謝申し上げます。

おわりに、出土品の鑑定や保存処理にご助言や貴重なご意見、ご教示を賜りました国立歴史民族博物館の先生方、長野県埋蔵文化財センターの先生方をはじめ、お世話になりました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成６年３月22日

岡谷市教育委員会

教育長　齋藤　保人

例　言

1．本報告書は、平成５年度榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡発掘調査及び試掘・確認発掘調査の報告書（概報）である。
2．調査は、国および県から補助金交付を受けた岡谷市教育委員会が、平成５年４月14日から平成６年３月19日にかけて実施した。整理作業は主に１月～３月に行ったが、出土品は十分な整理が終了していないため、概要の掲載にとどめてある。
3．出土遺物、記録図面、写真等の資料はすべて岡谷市教育委員会が保管している。
4．榎垣外遺跡出土の墨書土器鑑定は国立歴史民族博物館平川南氏に依頼した。
5．本報告書中の原稿執筆は志平遺跡、長塚遺跡、庄ノ畑遺跡を林賢が、地獄沢遺跡を河西清光が担当し、全体の編集、作図は事務局で行った。

目　次

序
目次
1．平成５年度調査の概要……1
2．志平遺跡……3
3．長塚遺跡……12
4．試掘・確認調査
庄ノ畑遺跡……14
榎垣外遺跡出土墨書土器の鑑定結果……16
5．地獄沢遺跡……18

1．平成5年度発掘調査及び試掘・確認発掘調査の概要

平成5年度、岡谷市内において周知の遺跡に農地転用、公共事業等の開発行為が計画・実施され、市教育委員会が何らかの対応を実施した件数は24件をこえ、そのうち試掘・確認発掘調査は20件に及んでいる。そしてそれからさらに発掘調査したケースは3件3遺跡である。

本年度の調査の特徴は、ここ数年続いていた長地方面の平坦部（湖北地区沖積地）に調査が集中していた傾向から、やや山沿いの遺跡へと開発が移行している様子が窺われる。従って、縄文時代の遺構・遺物は、地獄沢遺跡において小竪穴群が、また志平遺跡や長塚遺跡から多くの住居跡が発見されるなどの結果となった。これに対して、ここ数年調査が集中した榎垣外遺跡などの調査は減り、弥生・奈良～平安時代の遺構・遺物の発見は少なかった。

志平遺跡では、天竜川に突き出した扇状地の末端まで20棟を越える住居跡が密集しており、多期にわたり集落が営まれていたことが窺われる。長塚遺跡においては、遺跡の東側を流れる沢に面した斜面では遺構が希薄になることが判り、集落の範囲を限定するうえで大きな成果が得られた。

また、地獄沢遺跡では150基を越える縄文時代中期の小竪穴の発見があり、多くの石器や土器を得ることができた。なかでも小竪穴内の石棒の出土は貴重な発見である。

今後とも僅かな面積の農地転用であっても確実に調査を継続させ、これまでの調査で得られた成果をより一層充実させることにより、さらに広い遺構群全体を概観し遺跡の性格を確定することができるであろう。

なお、発掘調査については本文中にその概要を記したが、試掘調査によって遺構が発見されず、発掘調査にいたらなかった箇所については以下の表によることにして詳細は省略した。

表1　平成5年度試掘・確認調査一覧表

	遺跡名	所在地	調査の原因	調査期間	主な遺構	遺構・遺物の時代外	
1	地獄沢	字上の原 261-2外	住宅建設	4.14～ 7. 8	縄住1小竪 155	縄文	発掘調査
2	志平	川岸東二丁目9919 1	住宅建設	4.15～ 5.26	縄住17弥住2外	縄・弥・平	発掘調査
3	庄ノ畑	銀座二丁目6588-2	駐車場敷地	5.31～ 6.21		縄文	
4	榎垣外（金山）	長地金山2922-1外	貸駐車場敷地	6. 4		平安	
5	長塚	川岸西一丁目3788-1	住宅建設	6.22～ 8. 3	縄住1小竪17外	縄文	発掘調査
6	長塚	川岸西一丁目3779-6	駐車場敷地	7.20～ 7.21		縄文	
7	榎垣外（向田通）	長地字向田通4753-1	住宅建設	7.20～ 7.29		平安	
8	庄ノ畑	銀座二丁目10-13	住宅建設	7.21～ 7.23		縄文	
9	上向	字上ノ原 294-1外	宅地造成事業	9. 1～ 9.21		縄文	
10	榎垣外（小田野沙上）	長地字小田野沙上3064-14	住宅建設	9.10		平安	
11	間下堂山	神明町二丁目688-1	洗車場敷地	10.12～10.18		縄文	
12	小都沢	山手町一丁目4029-1外	区画整理事業	11.15～12.20		縄文	
13	市営球場南	山下町二丁目2890-8外	貸駐車場敷地	12.13～12.22		縄文	
14	広畑	川岸上四丁目1602-3	住宅建設	1.10～ 1.12		縄文	
15	神海塚	山下町一丁目2746-3外	工場建設	1.10～ 1.26		縄文・平安	
16	榎垣外（上尼堂）	長地上尼堂1591-53	貸駐車場敷地	1.19～ 1.20		縄文	
17	海戸	天竜町三丁目1-6	公民館建設	2. 2～ 2. 4		縄文	
18	榎垣外（蟷螂塚）	長地蟷螂塚3684-1外	住宅建設	3. 1～ 3.10		平安	
19	榎垣外（上町）	長地字上町3407-1	駐車場敷地	3. 7		平安	
20	榎垣外（伊那道上）	長地字伊那道上2238-1外	駐車場等敷地	3. 7～		平安	

第1図　試掘・確認発掘調査地点（番号は表1の一覧表に同じ）

2．志平遺跡

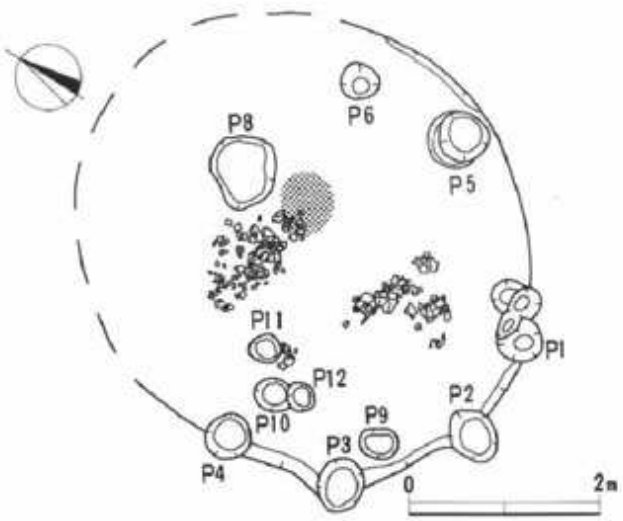
1．発掘調査の場所　岡谷市川岸東二丁目9919-1
2．土地の所有者　高林　政友
3．発掘調査の期間　平成５年４月15日～５月26日
4．調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　１５９㎡
6．発見された遺構　縄文時代中期住居跡17棟
弥生時代住居跡２棟
平安時代住居跡２棟
7．発見された遺物　縄文時代中期土器19　後期土器１　弥生式土器１　石鏃58　石錐３　石匙10　石錘４　打製石斧 112　磨製石斧20　敲石４　凹石25　石皿３　土錘２　石棒１　装身具１　土器片石片12箱

志平遺跡は志平沢が造った扇状地上にあり、この台地の尖端部にあたり、従来から天竜川に接した遺跡として注目されてきた。

調査地は最も天竜川に近く、現在の河床との比高は約８ｍ位であるが、天竜川は今までに約２ｍの掘り下げを行っており、縄文時代の比高は５～６ｍほどと考えられる。川縁（かわべり）にありながら、長い間集落が営まれたのは、この地が安定した環境であったためであろう。本遺跡は、縄文時代前期から縄文時代後期、さらに弥生時代後期、平安時代にまで生活が営まれていたことがわかった。

調査では、21棟の住居跡に８ヵ所の埋甕、３ヵ所の埋甕炉が発見されるなど、159㎡の狭い範囲で多くの遺構が展開しており、遺構の新旧の判断に苦慮した。土層の堆積は、耕作土層が30cmほどあって、以下黒色土層になる。この黒色土層が遺構の覆土となっている。遺構は礫を含む褐色土層に掘りこまれているが、この地層はローム層の流下による第二次堆積層である。

調査は調査区を南北に北より１～10、東西に西よりＡ



第５図　３号住居跡平面図（１：80）

第２図　調査区北側

第３図　３号住居跡　遺物出土状態

第４図　３号住居跡　遺物出土状態

第６図　３号住居跡

～Ⅰグリッドと設定し基準とした。遺構番号は従来の調査からの通し番号である。

第3号住居跡

本住居跡は、E－6グリッド調査区の中央部に位置している。大きさは径5mの円形である。南壁は12号住居跡を切っており、北東壁は5号住居跡の弥生住居跡に重なり、北壁は11号住居跡に切られて確認できなかった。

遺物は、耕作土下から散見され、覆土の下層になるにしたがい出土が多くなり、大小の転石も散見できる。住居竪穴中央部の床面には、土器が2ヵ所にまとまって出土、その近くに2ヵ所の焼土の床が見られた。床面は固く、タタキしめられ、わずかに傾斜している。

残在する壁は、西南壁で30～40cmで西から北に向かうにつれ掘込みが浅くなっている。発見された柱穴は11本で、P1～P6が主柱であろう。

出土遺物は覆土の上層から打製石斧6・擂石1・凹石1、覆土の下層から石鏃1・石匙2・打製石斧11・凹石1である。

本住居跡は、出土土器からみて、縄文時代中期初頭の時期である。

第4号住居跡

本跡は、G－6グリッドの掘り下げによって埋甕の口縁部が見つかり、住居跡の存在を予測し調査したものである。

北壁は、5・9号住居跡によって、また、東側の一部は13号住居跡に切られていた。南側は、19・23号住居跡と同一レベルで重複していてはっきりしない。

大部分は未調査区にあって全容は不明である。床面は固い部分も見られるが、礫を含む褐色土層は薄く、貼床されているが、不明確な部分が多い。検出された2点の埋甕によって住居跡の範囲を決定した。2基の埋甕は、西側の壁近くに南北に並んで埋設され、南側の埋甕は板状の自然石が被されていた。2基とも、正位の状態であるが、底部を欠く。

検出された柱穴は、11本である。覆土の上層で打製石斧1、覆土下層から石鏃3・打製石斧3、埋甕内から石鏃1、P5から打製石斧1が出土した。

埋甕から縄文時代中期後葉に比定される住居跡と思われる。

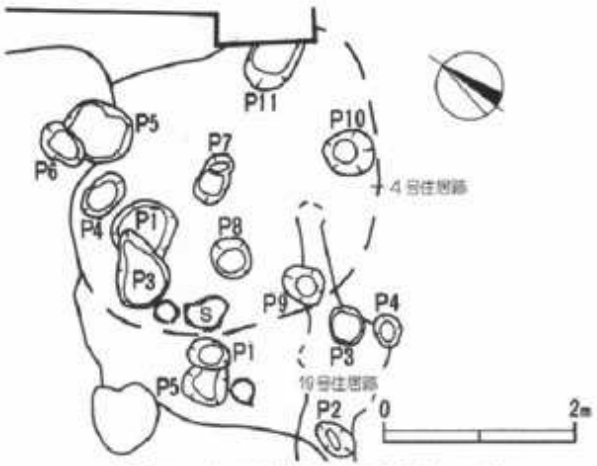
第5号住居跡

本住居跡は、東西方向を長軸とした、6×5mあまりの隅丸方形を呈する弥生時代住居跡である。重複がはげしく壁は、ほとんど検出されていない。床面は、若干北に向かって傾斜する。南半分は、礫を含む褐色土層に薄い貼床をして床とし、北半分は8号住居跡の覆土の上に貼床して床としている。

検出された柱穴は13本、P1・P3・P4・P5・P

第7図　4号住居跡

第8図　埋　甕



第9図　4・19号住居跡平面図（1：80）

第10図　5号住居跡

6・P8を使った6本柱と考えられる。炉は、西側の柱穴間の埋甕炉で、炉体土器は胴部より下半分が欠損している。埋甕炉の周辺に若干の焼土が見られた。

この土器から、弥生時代後期の住居跡と判断できる。本住居跡の出土資料は埋甕炉の資料以外は弥生時代の土器片数点で、覆土上層から石鏃2・打製石斧4・凹石1・覆土下層から石鏃5・打製石斧5・磨製石斧1・環状耳飾1、P4から石鏃1、床面上から石鏃3、P3から凹石1が出土した。

第11図　埋甕炉

第6号住居跡

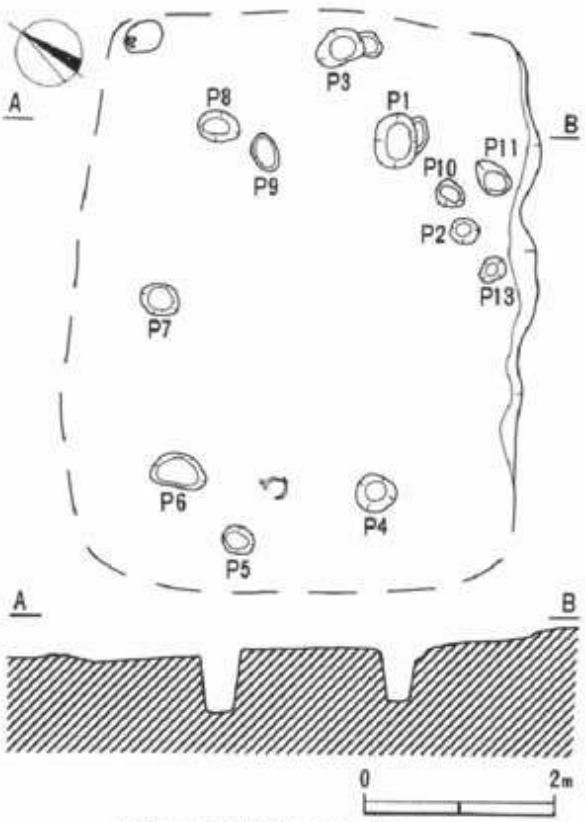
本住居跡は、E－4グリッドの調査のおり、耕作土の下層の黒色土層中に礫の集中が見つかり、この礫群を取除いたところ、東南に軸をとる石組カマドが発見された。カマドの周辺を調査したところ、黒色土層中にところどころ固い床面が見つかった。床はカマドの西北部に続いていたが、調査区外に広がり全体を調査することができなかった。

カマドは2枚の板状の石を並列に据え、燃焼口で幅40cm、煙道口で幅35cmである。この外側に石積みがあり、粘土の構築材で固められている。明確な火床は見られない。

出土した遺物は、須恵器片数点、カマドの集石中から砥石1点、覆土中から打製石斧3点が出土した。本住居跡では、カマド以外の遺構は見つからず、平安時代のものと判断する。

第7号住居跡

本住居跡は、8号住居跡の床面を調査した時、北に接して黒土の落込みが見られ、わずかの掘り下げで床の一部を確認した住居跡である。しかし、耕作がこの床面にまで達していて凹凸が多い。大半は、調査区域外にあって確認しただけで終わった。



第12図　5号住居跡平面図（1：80）

第8号住居跡

本住居跡は、弥生時代の5号住居跡の北半分の貼床を取除いたところ、地山を10～20cm掘り下げた壁が見つかり発掘したものである。

南壁は、弧を描いて北に開き、壁面は褐色土層の礫が顔を出している。西側および北側の一部は7・11号住居跡と重複しており、壁の確認はできなかった。

なお、北側の一部と東側は調査区外となり全体を調査することができなかった。

第13図　6号住居跡　カマド石組

住居は径5.5mの円形の竪穴住居と考えられる。礫を含む褐色土層上に薄い貼り床がされている。柱穴は11本が確認された。西側のP1とP4の間から埋甕が発見された。土器の大きさは口径38cm、底部は破損していて、深さ40cmで埋設されていた。上部を欠いているが、復原した高さは60cmの大型土器である。P1から凹石1、石製円盤1が出土した。

炉は中央やや東寄りにあり、東西90cm、南北110cm、深さ70cmの擂鉢状に掘り込まれていた。炉の北側の縁には幅20cm、長さ80cmの石が据えられ、東側には板状の石が差し込まれていた。南、西の配石は取除かれてな

い。炉内は黒色土で埋まっており、骨片が出土した。特に北側角柱状の炉石にそった炉壁にまとまって見つかった。炉底はよく焼けていた。

出土遺物は、覆土下層から石鏃１、磨製石斧１、土錘１、不定形石器２が出土した。

埋甕の土器から縄文時代中期後葉の時期と考えられる。

第９号住居跡

Ｈ－５グリッドで見つかった固い床面から住居跡としたが、調査の進展に伴い５号住居跡の南東部分であることが明らかとなった。

第10号住居跡

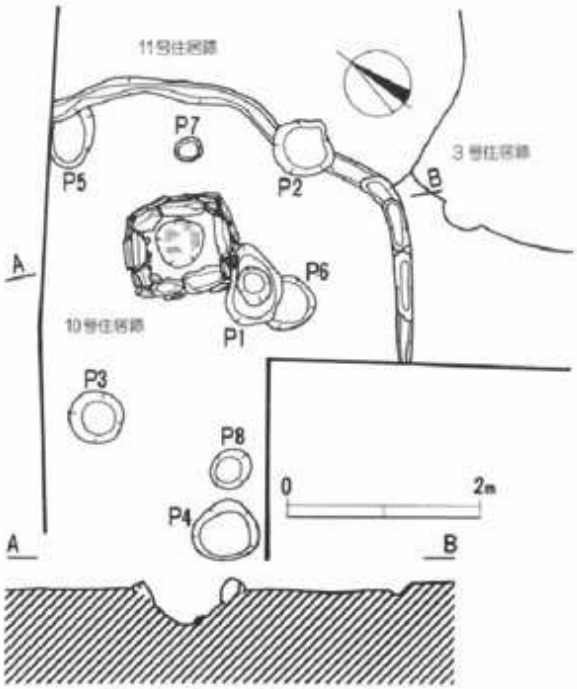
Ｄ－４グリッドの発掘において、南壁の一部と床が確認され、６号住居跡の調査後、黒色土を削土して見つかった住居跡である。南東側の４分の１と西側の一部分が調査できた。

床は炉の周辺は堅いが炉の東側は11号住居跡の上に床が延る。周溝は幅20～25cm、深さ20cmで南壁から東壁に弧を描いて見られた。柱穴は９本でＰ２、Ｐ３、Ｐ８が主柱と考えられる。平面形は径５ｍほどの円形である。

炉は竪穴の中央やや東寄りに作られている。径70～80cm、深さ40cmの擂鉢状に掘られた穴の縁に８個の板状石を縦に埋め込んだ長方形の石囲炉である。西側の炉石２個だけは平らに据えられており、焚口であろうか。なお炉石の外側にそって、鉄平石が差し込まれて二重となっている点は興味深い構造である。炉の上面および周辺には土器片が礫とともに出土した。また炉穴覆土にも拳大の石が詰め込まれたように発見されている。炉床は３cmの厚さに焼けていた。

出土した遺物は覆土の上層で打製石斧１、磨製石斧１、覆土下層から石鏃１、石錘１、打製石斧３、磨製石斧１である。Ｐ１から石錘１、Ｐ５から打製石斧１、Ｐ３から打製石斧１、磨製石斧１、炉内から石鏃１、磨製石斧２が出土した。

出土土器から、本住居跡は縄文時代中期後葉の時期と



第16図　10号住居跡平面図（１：80）

第14図　８号住居跡

第15図　埋　甕

第17図　10号住居跡

思われる。

第11号住居跡

本住居跡は、３号住居跡の南端を掘り込んで壁とし、10号住居跡の貼床下をめぐって西壁を作っている。北壁は調査区外のため不明、東側は８号住居跡と重なっている。推定で南北６ｍ、東西５ｍの楕円形の竪穴住居跡である。

床面は全体的に軟らかい。発見された柱穴は11本でＰ２、Ｐ６、Ｐ９が主柱穴であろうか。

炉は中央やや東寄りに50cm×40cmの楕円形の焼土が見られ、あるいは地床炉であろうか。焼土の厚さは３cmほどである。

遺物は覆土上層から石鏃２、打製石斧４、凹石２、覆土下層から石鏃１、打製石斧２、凹石２が出土している。

第12号住居跡

３号住居跡の南側に３・５号住居跡に切られてわずかに床面を残す住居跡である。覆土中に焼土と一緒に土器片がかたまって出土している。住居全体を知ることはできないが、柱穴３本が発見され、床面に径40cm、厚さ３cmの焼けた範囲が認められる。これは南に重複する20号住居跡の炉の痕跡であると思われる。

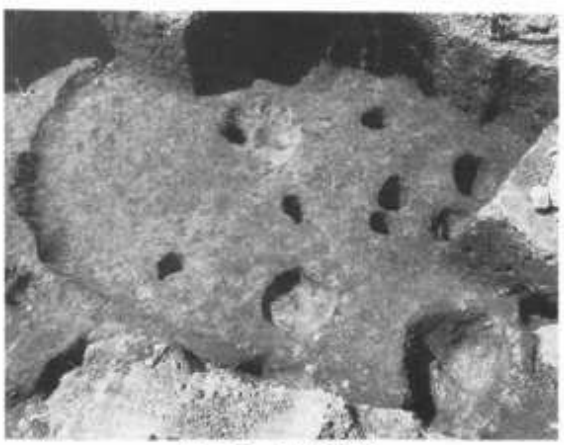
所属時期は明確にできなかった。

第13号住居跡

調査区の東端Ｉ－５・６グリッドに発見された。遺存状況が良好ではなく、床面も小礫が多く顔をだし平坦ではない。柱穴は１本が見つかっているだけであるが、Ｉ－５グリッドに埋甕２基が接して発見された。壁に近い側の埋甕には、板状の石が蓋石として被せられ、その下に口縁部と底部のない口径34cm、高さ30cmの土器が使われていた。もう１基は口径30cm、高さ20cmの底部を欠く土器が埋設されていた。

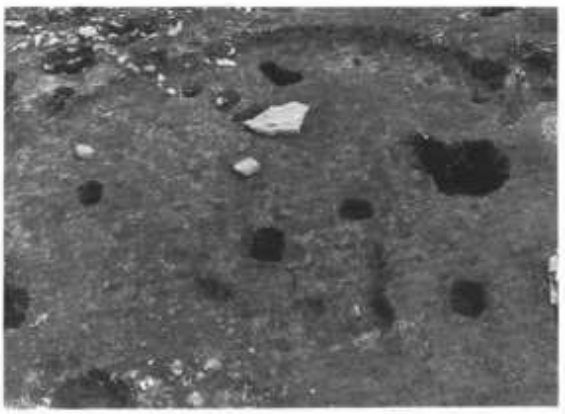
遺物は覆土の下層から石鏃２、打製石斧２、凹石１が出土した。

所属時期は埋甕からみて縄文時代中期後葉である。



第21図　15号住居跡

第18図　石囲炉



第19図　11号住居跡

第20図　13号住居跡　埋甕

第22図　15号住居跡ミニチュア土器出土状態

第14住居跡

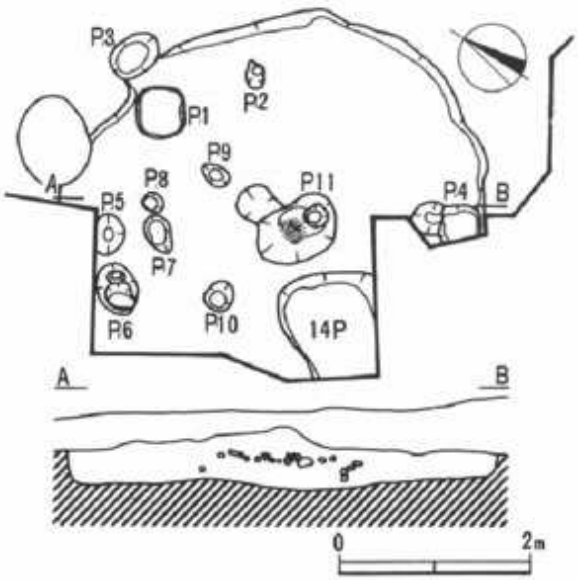
本住居跡は10号住居跡の調査時にC－3グリッドの黒色土層中に固い床面が発見された。しかし、大部分は調査区域外のため全体の約4分の1しか検出できなかった。柱穴は1本を確認、数片の弥生式土器が出土した。これから、本住居跡は弥生時代後期のものと思われる。

第15号住居跡

本住居跡は3号住居跡の西側、D－6グリッドに発見された。西半分は調査区域外にあって全体を知ることができないが、平面形は径5mの円形を呈すると思われる。床は全体的に軟弱で、残存壁高は15cm～20cm、東壁下には周溝がめぐる。柱穴は11本が発見され、炉はほぼ中央にあって、炉の掘り込みは90×60cmの大きさで深さ10cm、浅鉢状である。炉底部は焼けている。

遺物は石鏃1、打製石斧3、磨製石斧2、玉石1と多量の土器片が出土した。それから縄文時代中期中葉に属する住居跡と考えられる。

なお、覆土中に平安時代の22号住居跡が発見された。C－6グリッドの床上20cmから、投げ捨てられた石群が出土している。ここにはたくさんの土器片とともにミニチュア土器1点と磨製石斧1点が含まれていた。

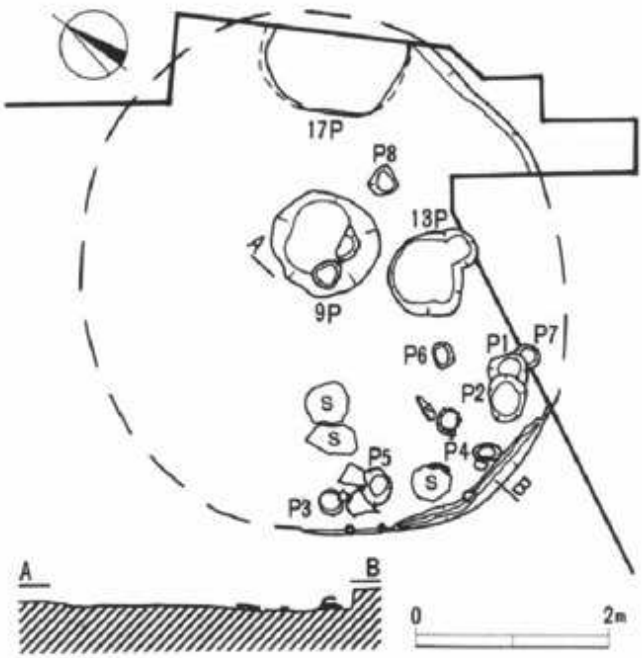


第23図　15号住居跡平面図（1：80）

第16号住居跡

調査区の南端を探るためにG－6グリッドを調査して発見された住居であるが、北壁は19号住居跡に、東壁は小竪穴に重複し、南壁は調査区外とあって、全容は知り得ない。平面形は円形を呈すると思われ、径5mと推定される。西壁は18号住居跡を5cmほど切り込んで、幅10cmの周溝が走る。柱穴は8本が発見された。床面は比較的平坦、堅緻で、西壁際から中央に鉄平石4枚が敷かれていた。また南壁際には丸い板状の石蓋を持つ埋甕が発見され、その西側にもう1基の埋甕が見つかった。前者

第24図　16号住居跡



第25図　16号住居跡平面図（1：80）

第26図　有孔鍔付土器埋甕

は口径28cm、高さ30cmの胴下半部を欠く土器が埋められていた。後者は壺形の有孔鍔付土器で特異な文様を持ち、赤色塗彩された優品である。炉は確認できなかったが、あるいは小竪穴によって破壊されているのかもしれない。

遺物は床直上から小型土器1、打製石斧1、磨製石斧2が出土、覆土中から打製石斧2、磨石1、凹石1、柱穴内（P1）から磨製石斧1、凹石1が出土した。

出土遺物から、この住居跡は縄文時代中期後葉に属するとみてよいであろう。

第17号住居跡

本住居跡は18号住居跡の床面より一段高く床面が見つかった。北側の床は18・16号住居跡によって切られている。南側は調査区外に近く、狭い範囲の調査にとどまった。

柱穴は1本検出され、石鏃1点が出土した。

出土遺物から縄文時代中期中葉の時期に属すると思われる。

第18号住居跡

F－19グリッドに発見された床面をもって住居跡と確認した。南壁は17号住居跡を切っているが、東側は16号住居跡に、西側は21号住居跡に切られている。また、小竪穴の15P・16Pが重複していたため、全体を明らかにできなかった。覆土中から石皿1点が出土している。所属時期ははっきりしない。

第19号住居跡

本住居跡はG－6グリッドで発見された床と埋甕炉によって存在が確認された。北側は4号住居跡に切られ、南側は16号住居跡に重複する。床面はピットが多く、撹乱層が一部入るなど全体を知ることはできなかった。

埋甕炉は、口径25cm、高さ15cmの胴部を欠く土器を埋設し、その周辺に若干の焼土が見られた。炉体土器から縄文時代中期中葉に属する住居である。

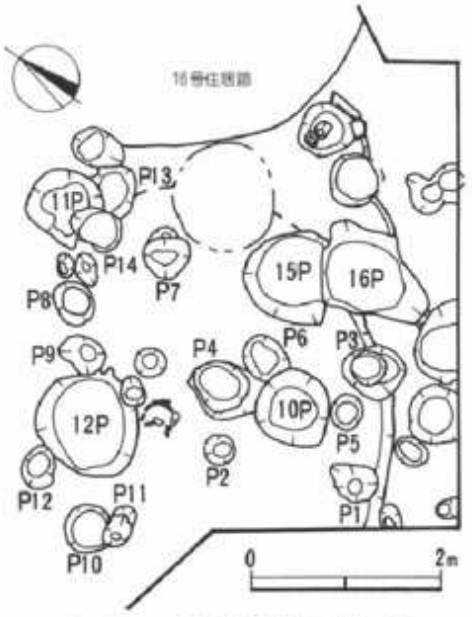
第20号住居跡

19号住居跡の床面精査において、G－7グリッドに黒色土の落ち込みが検出されて調査された住居跡である。南壁は19・21号住居跡を切っているが、北側は12号住居跡に削られて、わずかに床を残すだけである。床面は軟弱で、北に向いてやや傾斜する。柱穴は6本発見され、そのうち5本は、壁際に等間隔に並ぶ。

出土遺物が少なく、時期は不明である。

第27図　21号住居跡　埋甕炉

第28図　23号住居跡　埋甕炉



第29図　21号住居跡平面図（1：80）

第21号住居跡

E・F－8・9グリッドに発見された住居跡で、18号住居跡を切っている。床面のレベル差は5～10cmである。床面は若干北に傾斜し、部分的に堅い面がみられるが、5基の小竪穴や撹乱層があって凹凸が多い。南壁下に周溝があり、柱穴は14本発見されている。推定4.5mの円形の竪穴住居とみられる。炉は、中央の、径50cm、深さ10cmの浅い堀り込み内に、同一個体の土器破片で囲われた土器囲い炉である。若干焼土が残る。

炉の近くからまとまった土器片の出土があるほか、遺物は石鏃1、打製石斧1、凹石1、磨製石斧1、石匙

1が出土した。

炉内の土器から縄文時代中期の住居跡と考えられる。

第22号住居跡

本住居跡は、15号住居跡を調査中に、焼土の堆積と大小の礫が発見され、精査されたものである。焼土付近には須恵器片が出土し、礫はカマドの構築物であることがわかり、平安時代の住居跡と確認されたが、壁や床も確認できず、実態は不明である。

第23号住居跡

調査区東端のⅠ－7グリッドで埋甕が発見され住居跡と確認した。しかし、遺構の大部分は調査区外にあるため、その様相はつかめなかった。

埋甕は口径38cm、高さ20cmで胴部下半分が破損している。東側の土器の欠けている部分には、板状の石で補足されてあった。この土器から、縄文時代中期中葉に属する住居である。

小竪穴　今回確認された小竪穴は11基である。その多くは調査区の南側で、住居跡と重複して発見された。

9P

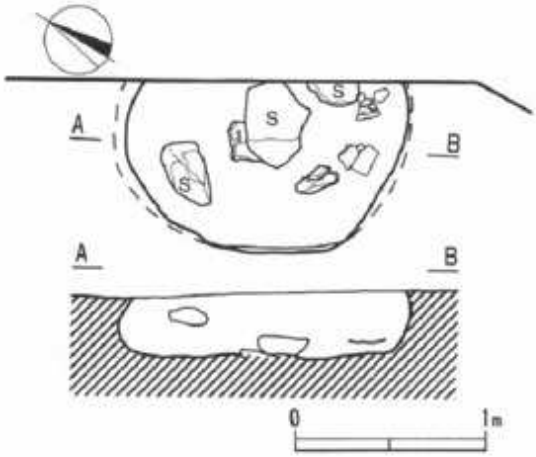
H－8グリッドで発見された。径120cmの円形で、一部浅いところもあるが、深さは約70cmである。竪穴内は黒褐色土が詰まり、数個の自然石が介在していた。基底部には焼土が見られ、覆土全体に炭化物が多く含まれていた。16号住居跡の炉であった可能性がある。

10P

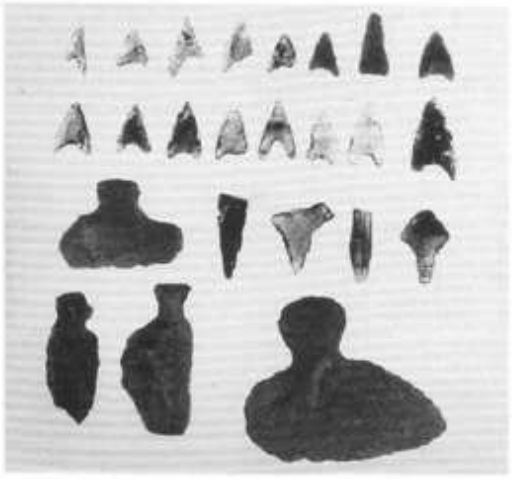
E－9グリッドで検出された。覆土上面には拳大の礫が多く詰められていたが、竪穴内は黒褐色土が詰まっていた。平面形は径75cmの円形をなし、深さは50cmほどであった。

17P

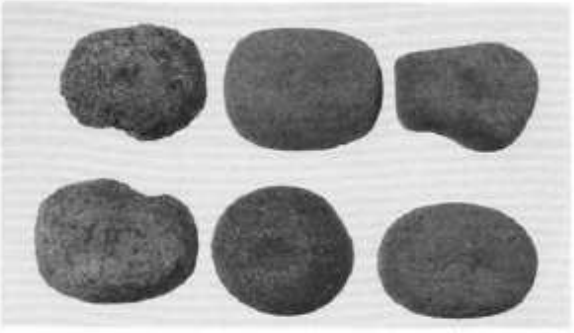
Ⅰ－8グリッドで発見されたもので、東半分は調査区域外のため発掘できなかった。南北150cmでほぼ円形と思われる。壁は袋状に掘られ、深さは35cmであった。基底は平らで若干堅い。基底の中央には人頭大の石が数個見られ、その南側には縄文時代後期の深鉢土器一個体分の



第30図　17P　平・断面図（1：80）



第31図　石鏃・石錐・石匙



第32図　凹石

第35図　打製石斧・磨製石斧・装身具

第33図　17P　出土土器

第34図　3号住居跡　出土土器

破片が出土した。

今回の調査で志平遺跡が長い間にわたり、集落が営まれてきたことがわかった。特に縄文時代中期の中頃から後半にかけて大変栄えていた様子がうかがわれる。

また、天竜川縁に見られる扇状台地での集落のあり方を知る上で、多くの資料が得られた。今後、同様の遺跡の調査に大きな助けとなるであろう。

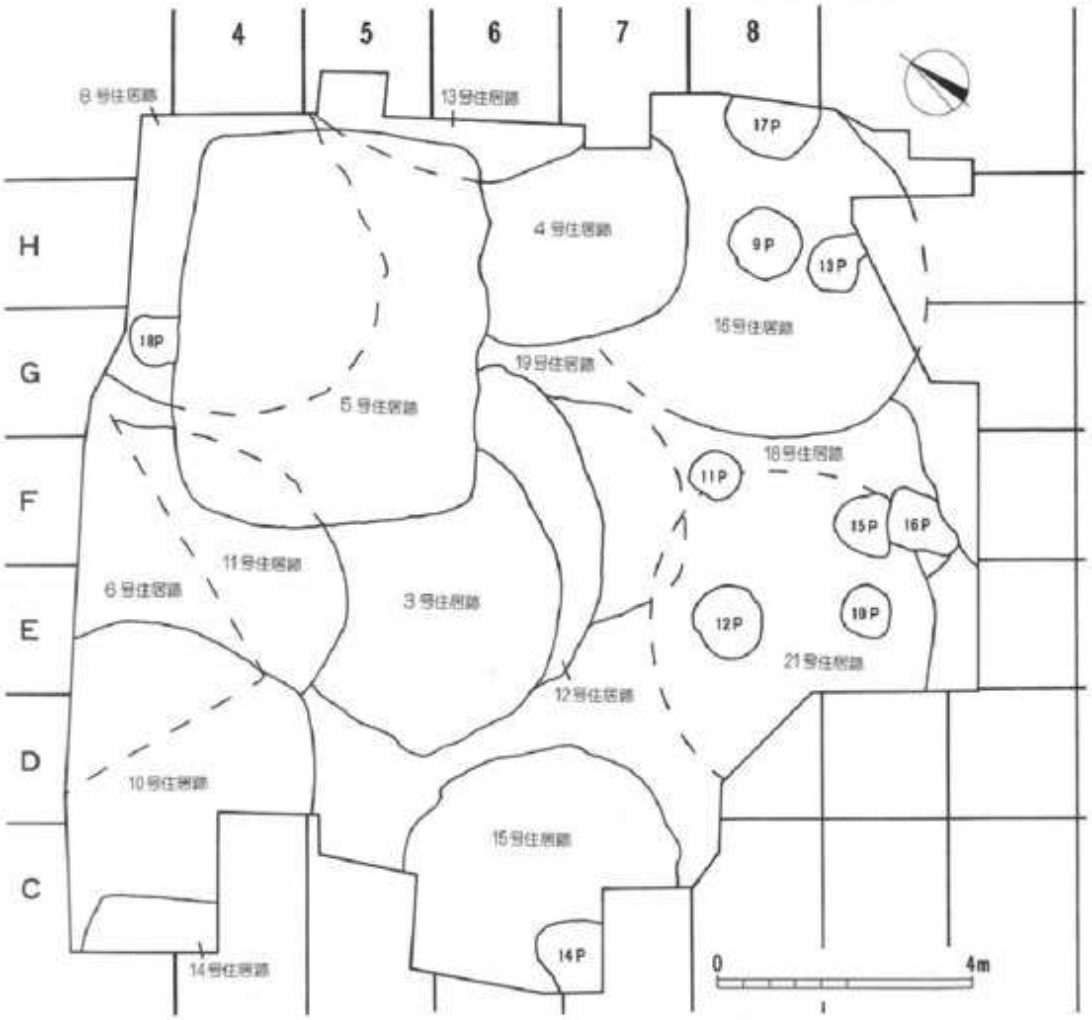
第36図　10号住居跡　出土土器

第37図　4号住居跡　埋甕

第38図　8号住居跡　埋甕

第39図　15号住居跡　ミニチュア土器

第40図　16号住居跡　出土土器



第41図　志平遺跡遺構配置図（1：120）

3．長塚遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市川岸西一丁目3788-1
2．土地の所有者　窪田　とみ子
3．発掘調査の期間　平成５年６月22日～８月３日
4．調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　１４４㎡
6．発見された遺構　縄文時代中期住居跡１棟
平安時代住居跡１棟
掘立柱建物跡１棟
縄文時代小竪穴17基
7．発見された遺物　縄文時代中期土器１　石鏃７　打製石斧５　磨製石斧１　凹石３　古銭22　土器石片２箱

長塚遺跡は裏山から流れ下る沢によって造られた扇状台地で、ほぼ南北に走っている。尾根筋に道路があり、その西斜面が平成４年度に調査され、東斜面が今回の対象となっている。

調査の結果、縄文時代中期の住居跡１棟、平安時代のカマド跡１ヵ所、小竪穴17基、掘立柱建物跡１棟、柱穴跡多数が発見された。

この調査区域は、山側の４分の３が水田造成のためにローム層まで削土されており、北端部で地山まで削り取られ、大きな礫石を含むローム層となっていた。そのためこの地区では遺構の上層部は勿論、遺物包含層まで削られ、小竪穴及び柱穴の検出にとどまった。

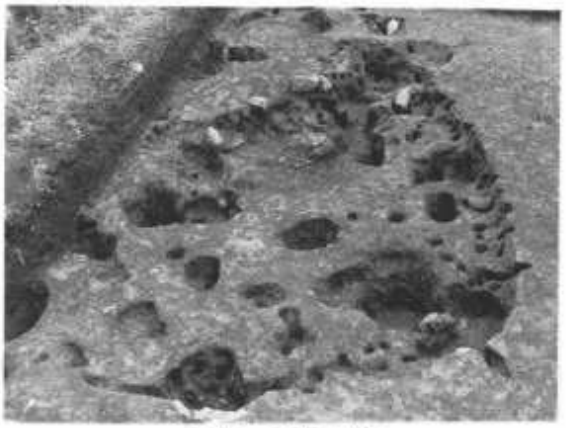
28号住居跡（縄文中期後葉）　この住居跡は、これまでに調査された住居跡番号に引き続くものとして、第28号住居跡と付けられた。

大きさは一部未調査の部分があるため推定によるが、長軸は北東から南西に向い約６m、短軸は北西から南東に向い約５mの隅丸方形の竪穴住居跡である。西壁付近には、径150cmの肥桶が埋設されており、また耕作がローム層まで達していて、遺構の確認は正確にできなかった。南壁は調査区域外のため発見できなかった。北壁、東壁にはローム層の掘り込みが10～15cm見られた。周溝の直下には、幅18～20cm、深さ約15～20cmの周溝がめぐり、北東壁の一部には２条の周溝が認められた。

床面はやや南に向って傾斜しているため、床面まで耕作が達していて、検出は困難であった。また、小竪穴４基、柱穴と思われるもの31基が検出された。その内、東壁のほぼ中央に径70cm～80cm、床面からの深さ40cmほどのピットが発見された。壁際に大小10個の石が積まれてあったが、本住居跡に関係するかは確定できない。

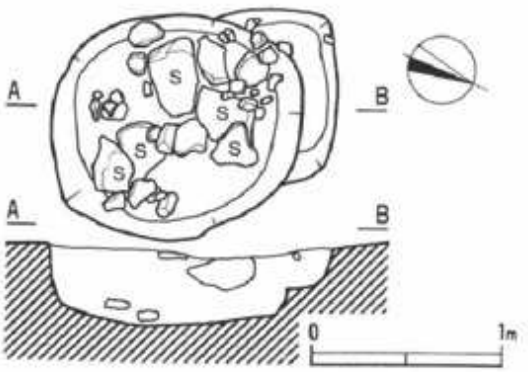
炉は中央部に２ヶ所見られ、若干の配石があり、焼土が認められた。この２ヶ所の炉は隣接していて、一方の炉が他方の炉を掘り込んで作られていることから、この住居跡は少なくとも２時期の重複、あるいは建て替えがあると考えられる。新しい炉の配石は４個が残り、他は

第42図　調査区全景



第43図　28号住居跡

第44図　28号住居跡　遺物出土状態



第45図　24Ｐ礫出土状態（１：80）

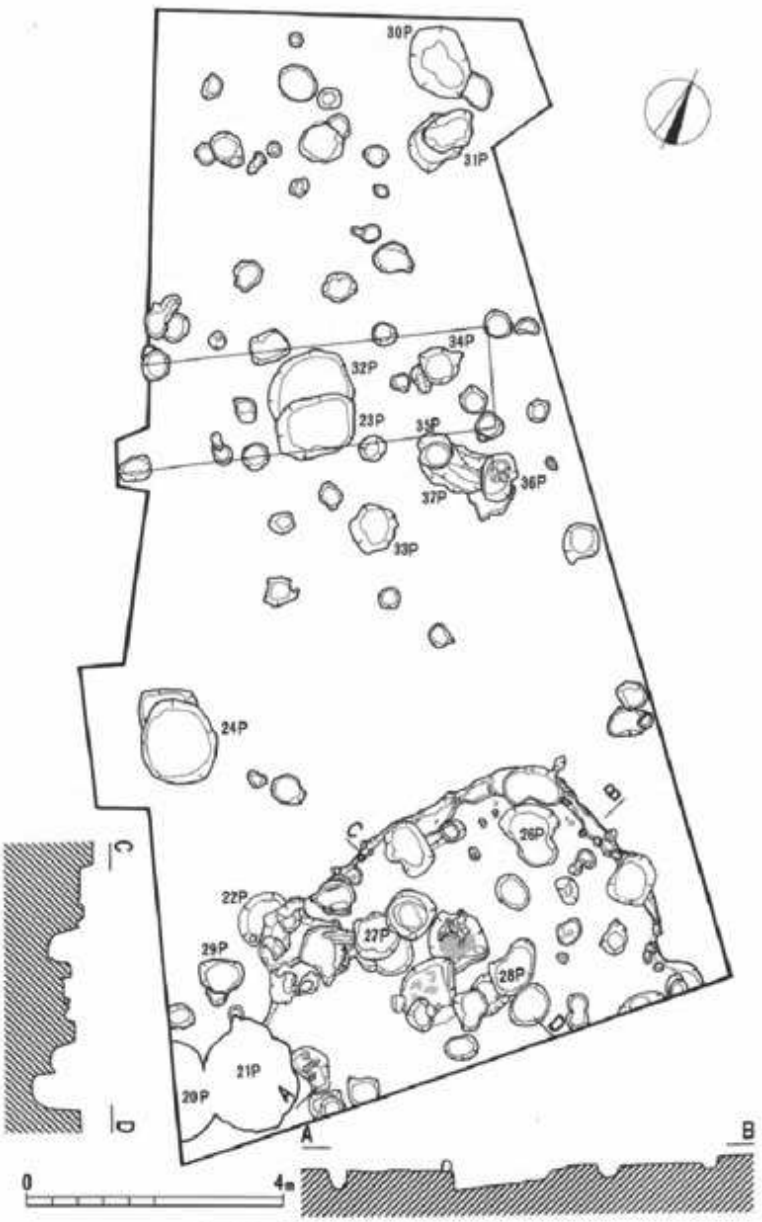
取り除かれている。両者とも焼土の厚さは10cmほどである。出土遺物は少なく、新しい炉の北側床面に接して横向きに一括土器が出土しただけで、土器片が散在的に出土したにすぎない。他に石鏃4点、磨製石斧1点、打製石斧5点等が出土した。なお、南壁の耕作土の削土中、耕作土の下層から寛永通宝22枚が出土した。また、古い炉の南側に床面より30cmほど下げた小竪穴内から数片の縄文時代後期の土器片が発見された。これは小竪穴内の伏甕と考えられる。また、ローム層上25cmの黒色覆土中に長軸50cm、短軸30cmの範囲に焼土が検出された。厚さは10～15cm、拳大から人頭大の石4個が配石され、周辺から数点の須恵器片が出土した。平安期のカマドの可能性がある。

掘立柱建物跡　調査区の中央よりやや北寄りに、掘立柱建物跡の一部と思われる柱穴列がほぼ東西方向に、4本ずつ2列に並んで発見された。柱穴はどれも形状が一致し、径は40～50cm、ローム面からの掘り込みは35cmである。柱穴間は180cmで覆土は他のピットに比べて軟弱であった。水田の床がこの柱穴を覆っていることから、水田造成以前の遺構であることは間違いないが、この遺構に関係する遺物はなんら認められなかった。

小竪穴及び柱穴　調査区全体で小竪穴は17基が検出された。大小さまざまで一定していない。素掘りのままのもの、礫石が埋めこまれているもの、底部に板状の自然石が据えられているものなどである。小竪穴、柱穴からは石鏃が2点、凹石2点が出土した。出土遺物が少なく、時期の決定はできない。

これまでの調査で、本遺跡は、南及び西斜面に展開し、東斜面は沢に向って急斜面となるために集落は営まれなかったと考えられる。今後、南及び西斜面の調査によって、扇状台地の集落の展開の様子をさらに知ることができる。そのことは、天竜川に突出したいくつかの台地に営まれた縄文期の集落構造を知る上で、重要な手がかりとなるであろう。

第46図　28号住居跡　出土遺物



第47図　長塚遺跡遺構全体図（1：120）

4．試掘・確認調査

庄ノ畑遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市銀座二丁目6588-2
2．土地の所有者　吉田　就明
3．発掘調査の期間　平成5年5月31日～6月21日
4．調査の目的・原因　駐車場敷地
5．調査面積　322㎡
6．発見された遺構　縄文時代晩期土器捨場
7．発見された遺物　石鏃4　擂石1　打製石斧10　磨製石斧2　凹石2　石皿1　土偶2　土器片石片6箱

第48図　包含層遺物出土状態

調査前の表面採集では少しの黒耀石片が見られる程度で土器片は、ほとんど見られなかった。調査は2m×2mのトレンチを20ヵ所設定し、別に本遺跡の北限を調査するためのトレンチ1本を設定した。

調査区域内には戦前の製糸業全盛時代にゴミ捨て場として使用された跡があり、各所に撹乱が見られたが、調査の結果、4ヵ所の遺物集中包含層を発見することができた。また、北側のトレンチで予想通り庄ノ畑遺跡の北限を知ることができた。

各トレンチの層序を見ると、いずれの遺物集中箇所でも、30cmほどの耕作土下に砂礫を含む第一暗褐色土層があるが、この層には遺物は見られなかった。その下に、黒色土層、第二褐色土層と続き、遺物が多く出土するのはこの2層であった。それ以下は砂礫を含む褐色土層となり、その下層は、大きな礫を含む褐色土層が続く。遺物は全く含まれない。

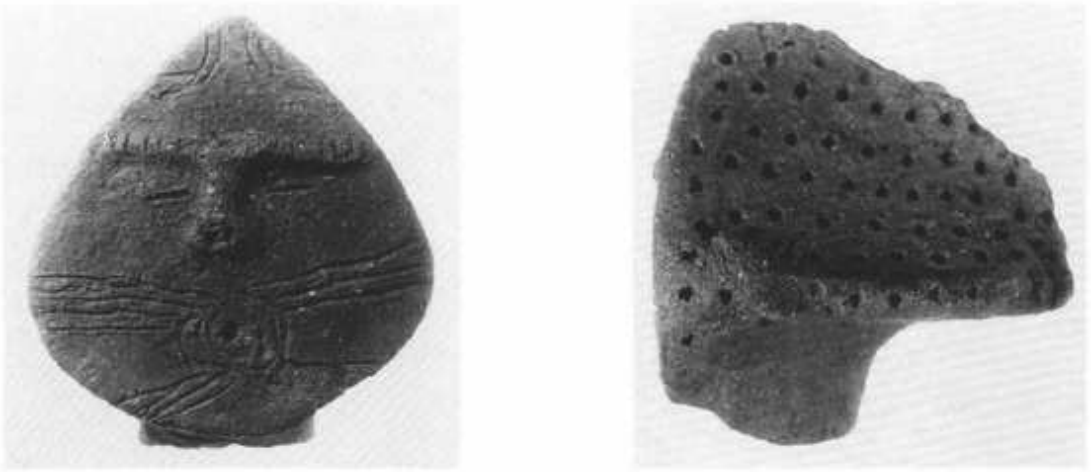
遺物包含層は、上記のように2層にわたっていたが、詳細に見ると、遺物は黒色土層の下層から第二暗褐色土層の上層に包含されていた。今回は遺物の出土の多い4ヵ所の集中部分を精査して遺物の分布状況・遺構の有無を調査した。遺物集中部は、おおむね4m四方に広がっており、これをはずれると遺物は非常に少なくなる。この範囲を精査したが、遺構の確認はできなかった。

調査の結果、第一暗褐色土層は今回の調査区全体に見られ、以前の調査結果とあわせて、この層は庄ノ畑台地全体を覆うと見られる。遺物集中部には大小の自然石が多数出土しており、全体にわたり黒耀石の細かいフレイクが多く出土している。4ヵ所の遺物集中部のうち2ヵ所から、また集中部以外でも1ヵ所に、黒耀石の集石址が発見された。黒耀石は10～15個、大きさ3～4cm位の原石で、その周辺から多くのフレイクが出土していることから石器の製作跡とも考えられる。

出土遺物は、土器片・石器・石片・土偶等多くの出土があった。土器は全部破片ではあるが、器形を復原できるものも多い。いずれも薄手で色調は、多くは淡褐色である。文様によって分類すると、1．縄文時代晩期－浮線工字状文・磨消縄文・尖帯文　2．弥生土器－竹管描沈線文・貝殻条痕文・櫛描条痕文・口縁部の刻目文・櫛描波状文　3．その他－無文となる。このうち、3分の1は無文土器で焼成は固いもの軟弱なものなど、いくつかのバラエティーがあり、文様と器形の関係なども細別可能であるが、今後の資料整理を待ちたい。器形は従来の調査と同様、壺・甕が多いが、今回の調査では底部が小さく、胴部以下が砲弾形の胴長の細長い器形が見られた。

これら土器の中で2としたものは、庄ノ畑式土器とされているものであるが、4ヵ所の遺物集中部の中で2ヵ所は、これが主体を占めている。他の2ヵ所では、これとともに、1の工字状文・磨消縄文・尖帯文土器が一緒に出土しており、注目すべき点であろう。残念ながら、層序的な関係があるのかは不明確である。なお、籾圧痕のある土器片が出土している。

土偶は2点が出土した。1点は首から上の顔面部分で高さ5.5cm、顔面から後頭部までの厚さ5.5cmで、頭部は下膨(しもぶく)れで玉ネギの断面のような輪郭の顔をしている。顔の表情は入れ墨と思われる沈線で表現をされており、顳面土偶といわれるものである。他の1点は、腰から下の脚部であり、大きく開いた両足には施文はなく、土偶頭部とは焼成もかなり異なる。この2点は同一の土器集中部から出土した。庄ノ畑遺跡は、微高地を中心にして東西の緩斜面に立地する。今回調査を行った箇所は西向の傾斜面であったが、住居跡等の居住地としての痕跡は発見されなかったことから、集落の中心は、遺跡のほぼ中央にある微高地より東傾斜面にあると予想される。土偶の保存処理については、白沢勝彦氏（長野県埋蔵文化財センター）に、御教示頂いた。末筆ながら、厚く御礼申し上げる。

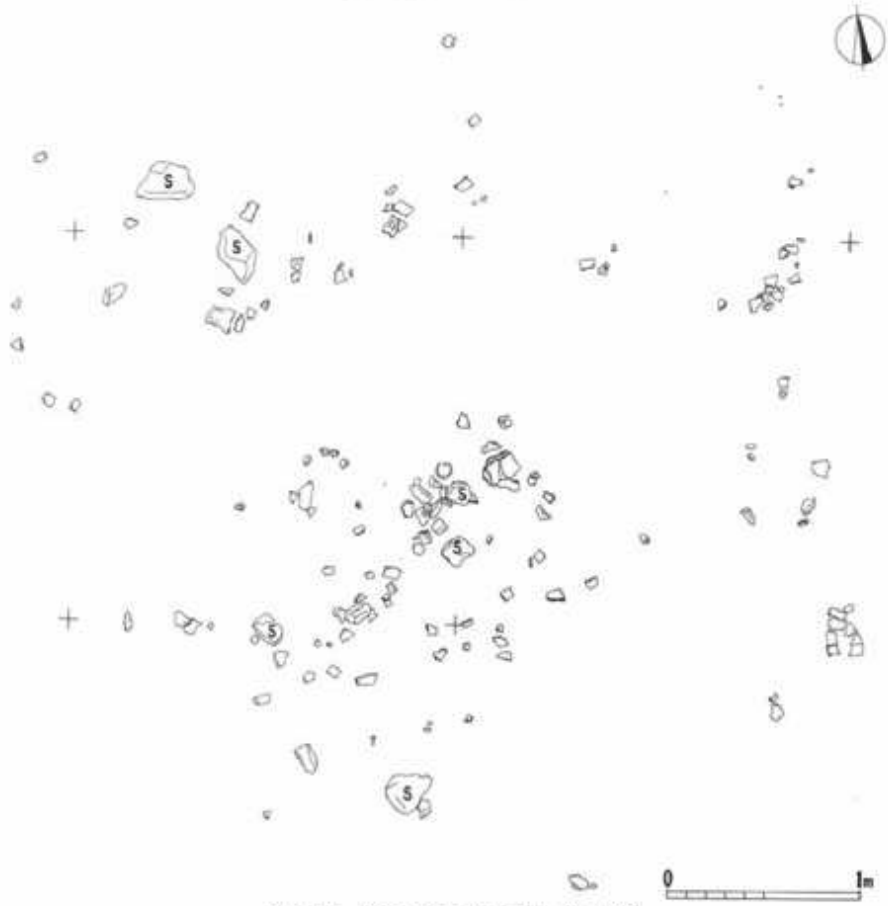


第49図　動面土偶頭部

第50図　土偶脚部

第51図　底部糸圧痕

第52図　包含層出土遺物



第53図　包含層遺物出土状態（1：40）

榎垣外遺跡出土墨書土器の鑑定結果

榎垣外遺跡榎海戸地籍出土の墨書土器

国立歴史民族博物館
平川　南

「神司」は〝かみのつかさ〟と訓み、字義からいえば、諸の祭祀を掌る官人またはその役所のことであろう。例えば、太宰府の官司の一つ、「主神」は「かみのつかさ」と訓み、太宰府における祭祀の主宰者およびその役所、中央における神祇官に相当するものである。

しかし、本資料の場合は、墨書土器としてのあり方に注目する必要がある。

官衙の墨書土器の場合、その代表例といえる「厨」関係墨書土器は、坏型土器のほとんど底部外面に書かれている。底部外面以外、若干体部外面に記されているものもあるが、その場合も正位に限定されている。

このことは、「厨」墨書土器は、食器として常態の使用時を想定して、底部外面および体部外面正位に記録されたことを示している。

それと対置されるのが、祭祀等の行為に伴う墨書土器の部位である。カマド祭祀に伴うとされる千葉県佐原市馬場遺跡004号住居跡出土の墨書土器の場合、次のとおりである。竪穴住居跡のカマド内燃焼部底面より浮いた状態で坏が4点重ねられて出土した。この4点の坏はすべて倒位に置かれ、その一番上に置かれた坏に「上」の墨書が記されている。この「上」は体部外面に倒位で記されており、坏を倒位に置くところによりはじめて文字の意味が明瞭になるのである。竈神が晦日の夜、家族の功罪を天帝に報告するのを防ぐ信仰が存在し、この土器の状態は竈を廃棄する際に竈神を封じ込めるために坏を伏せたものと解釈できる。また、千葉県芝山町庄作遺跡の例のように、一つは内面に墨書人面、外面体部に「丈部真次□代国神奉」、もう一例は外面体部に墨書人面、外面底部に「手」、内面に「国玉神奉」と墨書している。

このように祭祀等に伴う墨書土器は、いわば神への祈り、伝達という意味から土器の内面や、体部外面の場合も倒位や横位など、実に多様であったといえる。

本墨書土器は、体部外面に倒位で、しかも3ヵ所に放射状に記している点が特異といえる。部位等の記載のしかたからいえば、通常の官衙における官司の記載とみなすことができず、むしろ、祭祀等に伴う墨書土器と理解されるであろう。

一方、記載内容の点からは、次の資料が参考となる。

千葉県富里町久能高野遺跡、土師器坏、外面体部、横位墨書　「罪司進上代」

「罪司」は文字通り、人の罪を裁く司のこと、冥途の裁判官である。人々は自らの罪を免れるために、必死で坏型の土器に御馳走を盛って供えるいわゆる賂（まいない）行為を行なうのである。

千葉県成田市成田ニュータウン内遺跡群　LOC16（郷部）　土師器坏

底部「神奉」、体部「加」

「神奉」は、さきの「国玉神奉」に通じ、神への饗応を意味すると考えられる。

結局、本墨書土器の「神司」は、上記の数々の例に照らすならば、官衙における「神司」という正式な官司ではないといえよう。むしろ、記載部位、土師器坏という器種などの諸条件および「神奉」「国玉神奉」などとの関連からいえば、「神司」は人々に福徳をもたらす神をつかさどるものと解することができる。その点では、「神司」はさきの久能高野遺跡の「罪司」に類した用法といえる。

本遺跡の住人が招福除災の願いを込めて、土器に「神司」と墨書し、その器に御馳走を盛り、神への饗応を行ったのであろう。

〔参考文献〕

1．平川　南・天野　努・黒田正典　「古代集落と墨書土器－千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合－」（『国立歴史民族博物館研究報告』第22集、1989年）
2．平川　南「庄作遺跡出土の墨書土器」（山武考古学研究所『千葉県芝山町小原子遺跡群』1990年）
3．印旛郡市文化財センター『千葉県印旛郡富里町久能遺跡群発掘調査報告書』　1988年
4．平川　南「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」（『国立歴史民族博物館研究報告』第35

集、1992年）
5．平川　南「「厨」墨書土器論」（『山梨県史研究』創刊号　1993年）
6．秋田城跡発掘調査事務所「秋田城出土文字資料集」（1984年　第6図より）

第54図　「神司」墨書土器
榎垣外遺跡

第55図　「厨」墨書土器の例
秋田市秋田城跡

第56図　神への供献を示す墨書土器
外面底部「神奉」
外面体部「加」
千葉県成田市公津原遺跡　ＬＯＣ16遺跡

第57図

第58図
神への供献を示す墨書土器とその墨書部位
千葉県芝山町庄作遺跡

5．地獄沢遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市字上ノ原 261-2外
2．土地の所有者　宮坂　元子
3．発掘調査の期間　平成５年４月14日～７月18日
4．調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　１０５３㎡
6．発見された遺構　縄文時代中期住居跡１棟
縄文時代小竪穴155基
7．発見された遺物　縄文時代中期土器５　石鏃５　石錘２　打製石斧40　磨製石斧４　搗石２　凹石８　石皿４　装身具１　土製円盤１　石棒２　土器片石片12箱

第59図　調査区全景

調査の概要　今回の調査範囲は平成４年に行われた地域の南東側の斜面に位置している。調査前は果樹園や野菜畑として利用されていた。畑地表面には石が多く露出していた。また、開墾時の折には石が運びだされ、畑の周囲に石塚が高く築かれている。大石は石材に利用され、運び出された跡もあり、それがために剝片の散乱や、大割にしたまま放置されているものなどが見られた。上部の野菜畑に利用されていたところでは、畑を平坦にする作業の折に地山まで掘られ、段差がつけられている。幸いにも今回の調査した地域は、若干の破壊は見られたが、遺構の保存状態は良好であった。

調査は、昨年度の基準点を延長して、グリッドの設定を行い発掘を開始した。

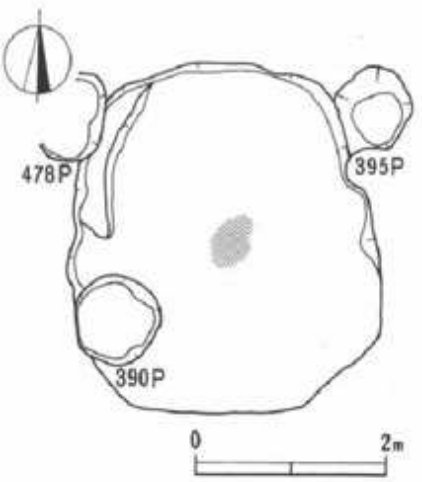
第60図　６号住居跡　遺物出土状態

（１）住居跡

６号住居跡（第60図）

本住居跡は、ＢＴ・ＢＵ－８・９グリッドで発見されたものである。台地斜面の南側に位置し、付近には地山から露出した大石などが見られる地点である。

主軸は、南北方向を示す。東西約3.1m、南北約3.65mの不整円形の住居跡である。それの主なる原因は、地山の石塊などによって生じたものと考えられる。遺構確認では、住居跡の壁周辺は褐色土、内にむかって暗褐色土、中心部は漆黒の黒色土が見られた。これらの覆土からは多くの礫や土器片が出土した。周壁の残存状況を見ると、北側壁は19cmを測り、東西壁は斜面のために半分位で終わっており、南側は地山の面より床面が約５～６cmほど下がっている。なお、北壁から西壁に沿って、壁縁から20cm、住居跡の床面から９cmの上ったところに最大幅20cm、長さ1.5mの床の間状遺構が認められた。この遺構は、住居跡の重複した状況とは異なり、増改築の結果によるものと思われ、次のことが考えられる。



第61図　６号住居跡平面図（１：80）

・　住居跡の床面をさらに掘り窪める折に、地山の堅固のために残存したのではなかろうか。特に炉址より北側は硬く、床面のレベルで見ると、北側近くと南側では約30cmの差がある。
・　家屋拡張の際に大石の露出、地山の硬さなどで中止せざるを得なかった。

以上、二つの仮説をした。他にも種々考えられるが、今回は軽々しい判断は避けて、遺物の分類など綿密にした後に結論を出したいと考えている。

床面は、先述のように北側と南側では高低の差が10cmある。床面の全面には多くの礫が露出して、非常に硬

い。炉址は地床炉で、住居跡の中央部に位置し、長径60cm、短径40cm、焼土は薄く堆積しており、火床面は深さ約3cmが赤化していた。なお、住居跡の西南隅に390Pが発見されたが、本住居跡の床が小竪穴上面で確認されていないところから、本住居より新しい遺構と考えられる。

遺物の出土状況については、先述のように覆土中より出土しているが、床面からは大きな破片もみられ、特に炉址を中心とした付近には集中している。また、炉址から南側の床面より上った位置に大小の石が見られたが、意図的に置かれたものとは考えられない。出土した土器は竹管工具による文様手法や、結節縄文の手法などから、中期初頭に比例されるものである。

（2）小竪穴

今次の調査において、155基が確認され、前年度に発掘された434基と合せると、589基に及び、中期初頭の遺構研究の好資料となろう。そこで、本報告では竪穴内に入った遺物等で大別して、それらの中から数例を報告したい。

1．石棒等を出土した小竪穴

477P　BV－5グリッドで発見された。竪穴の西南側の476Pに約4分の1ほどが切られている。平面は円形、断面はタライ状を呈す。口径は80cm、底部は65cm、深さは20cmと比較的浅い。覆土の堆積は暗褐色土で充塡され、特筆されることはないが、地山面と同じレベルで石棒が出土した。出土状況を見ると、小竪穴の中心部から西南方向に向けられており、石棒の頭部の下層には1個の礫と、石棒底部付近には3個の礫が置かれていたが、強いて言うならば、石棒を立石として使用した場合には支えに利用することは可能である。石材は安山岩で、敲打による製作で、長さ24cm、頭部の直径12cm、底部の直径9.5cmを測る。形態的には単頭石棒で、頭部と胸部に段を有するものである。これと同型のものとして、市内川岸の長塚遺跡から出土したものに類似している。

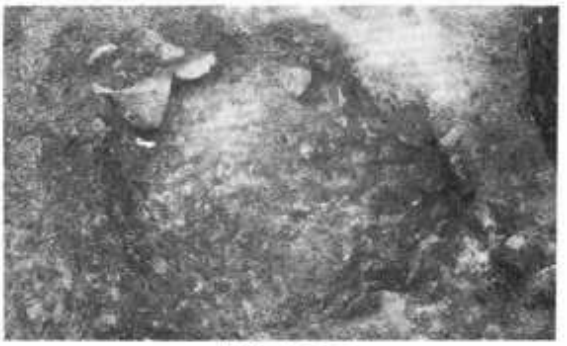
475P　BU－5・6グリッドで発見された。先の477Pから80cmほど南に下った位置にある。平面は楕円形で、断面は北側が袋状をなし、南側は外反している。口径は東西90cm、南北73cm、底径は東西75cm、南北80cm、深さは中心部で50cmを有している。覆土は上面に小さなレンズ状の暗褐色が見られ、下部には大小の礫が入った黒色土が見られた。

石柱の出土状態を見ると、小竪穴の東南壁の縁から北西にむかって落ち込んでいた。この状況から見ると、小竪穴の縁部に立石と使用されていたものが、転落したものと考えられる。石材は安山岩で、長さ59cm、断面四角形、先端部を欠いている。側面には若干ではあるが、磨擦痕も見られる。昨年度に調査した331P・336Pと類似している。

第62図　454P　礫出土状態

第63図　460P　土器出土状態

第64図　463P　土器出土状態



第65図　471P

2．石皿が出土した小竪穴

今回の調査において、石皿が出土した小竪穴は4例あり、498P・563Pの出土例は完形品492P・519Pから出土した石皿は半截されていた。

昨年度の調査では、2例が確認されたが、2例ともに半截されたものであった。

498P　BP・BQ－10グリッドで発見された。東側は大石のために壁となり、南側は地山の斜面のために壁は見られないが、ほぼ楕円形を呈しているといえる。口径は南北約75cm、東西70cm、深さは底部に地山の礫が露出しているために凹凸があり、北側で25cmの浅い小竪穴である。石皿は上向きで、周囲に礫を詰め込んだような状況で出土した。これらの例は563Pや、先述の昨年調査した例とは、小竪穴や石皿の出土状況が異なっている。

石皿の石材は安山岩で、形態は楕円形を呈し、中央の凹みは幅広い。

563P　C－11グリッドで発見された。南側の小竪穴を切断して構築している。平面は東側の平板の石によって境をなすように見える。また、小竪穴の縁や壁面にも地山の礫が露出しているために、不整円形となっている。断面はタライ状を呈しているといえよう。口径70cm、底径50cmで、深さは30cmを計測する。

石皿の出土位置は、北壁の底部に接していた。石材は安山岩。形態は卵形に近く、中央から下部にかけての部分を欠いて、形を整えている。

第66図　475P　石柱出土状態

第67図　476P　土器出土状態

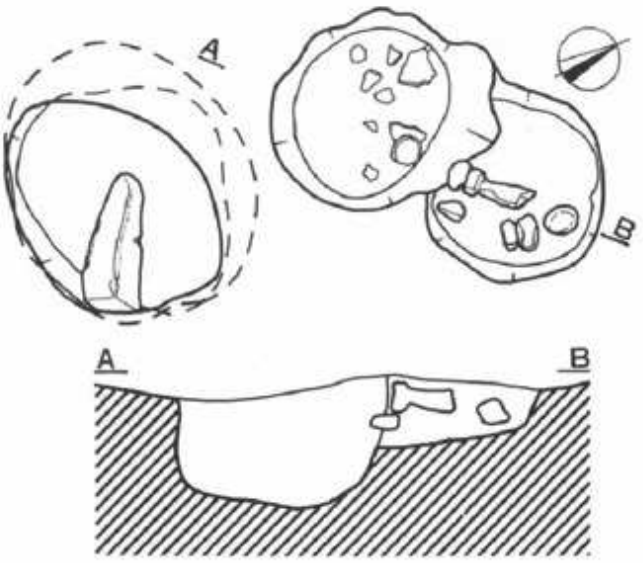
以上、石皿を出土した遺構の2例を略記したが、他の2例のうち、519Pから出土した石皿のように、縁部を欠き、凹み部のみ残っている例もある。

3．一括土器が出土した小竪穴

小竪穴の内部から土器小破片が出土した例は多かったが、一個体の出土、または半個体に近い土器が出土した小竪穴は10例に及んだ。今回はそれらのうち8例を紹介したい。

460P　BS－8グリッドで発見された。東側の小竪穴を切断して構築している。平面は不整の楕円形を呈し、断面は皿状となっている。しかし、この地域も地山に多くの礫が露出しているため変形していると思われる。発掘手法を見ると、地山の北側を掘って、壁を作り、その途

第68図　476P・477P　石棒出土状態



第69図　476P・477P　平・断面図（1：30）

中で礫が露出したため、そのままにして、さらに中央部を深く掘り、南側はなだらかに傾斜のままにしている。口径は南北90cm、東西50cm、深さは最も深いところで25cmを計測した。覆土は、北壁側は黒褐色土、中央部から南側は黒色土であったが、一部ロームブロックの混入も見られた。出土した土器は、小竪穴の中央の底部に近く、礫が交じるような状態であった。土器文様は竹管工具による平行沈線や斜行格子目文が施されているところから、中期初頭に比定されるものである。

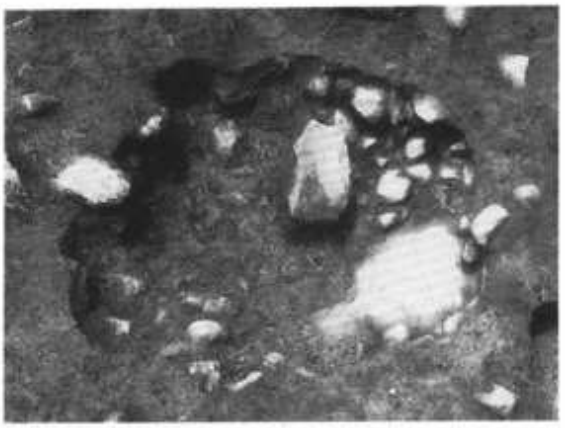
第70図　498P　石皿出土状態

463P　BT・BU－2・3グリッドから発見された。後述の471Pと南北に並んでおり、今次の調査範囲の最も東側で、4～5m進めば斜面は急激に落ちるところから地形的には崖錐の末端にあたる。小竪穴の分布から見れば、東の限界の位置にあるといえる。

小竪穴の平面は、地山の礫の露出などによって、不整の円形をなしている。底部にも大石があるために、そこを避けて周辺を掘り凹めている。断面形はタライ状といえよう。口径1m、底径80cm、深さ30cmである。覆土は黒色土のみで、大小の礫が混入していた。土器の出土状態は南側の壁に近く、底部を下に正位に出土した。底径9cmを測り、底部が張り出す形態をなしている。文様は結節縄文が施されており、中期初頭に比定されるものであろう。

第71図　501P　土器出土状態

471P　BU－2グリッドで発見する。先の463Pから北に60cm離れている。平面は円形、断面はタライ状を呈している。口径93cm、底径79cm、深さは約30cmを計測する。覆土は漆黒に近い黒色土で、特筆すべきことはないが、大小の礫と炭化物の微小片が目立った。土器は西側の壁近くに落ちこむような状況で出土した。文様は口縁と頸部に隆帯を横走し、頸部隆帯の下部に平行線による山形連続文がつけられ、その谷に雫状の平行線文が見られる。胴部は結節縄文で埋めているが、これら文様構成から見て、縄文中期初頭に比定される。



第72図　519P　石皿出土状態

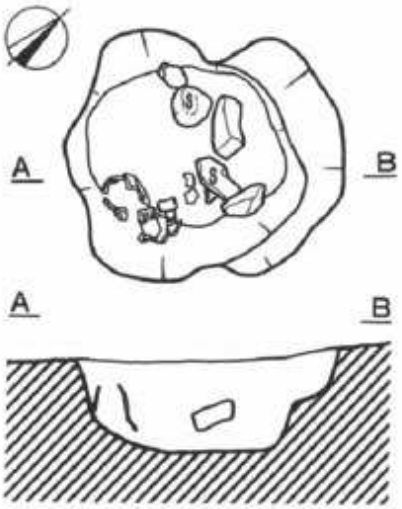
476P　BU・BV－5グリッドで発見された。先述の石棒を出土した477Pを切って構築している。平面はやや凹凸が見られるが円形で、断面はタライ状を呈している。口径は80cm、深さは40cmである。覆土の堆積については黒色土に炭化物の混入と若干の礫が見られた。土器の出土状況は東側の壁寄りの基底から10cmほどの上部から発見され、胴部はそれより下層で出土した。底部径14cmで、胴部が直立している。文様は太く、荒い縄文が付され、あまり装飾的ではない。

501P　BS－10グリッドで発見された。このグリッドは6号住居跡の西側に位置し、小竪穴が集中しているところである。平面は円形、断面は皿状を呈するが、底部は地山の礫が露出しているために凹凸が激しい。直径85cm、底径80cm、深さは最も深いところで20cmと浅い。覆土は黒色土とロームの流れ込みが見られ、上層には幼児人頭大の礫、下層には拳大の礫が詰められた様な状態で入っていた。土器は上層の人頭大の礫の脇に横位で検出されたが、口唇部と底部を欠いている。文様を見ると、口縁部の斜格子目文、胴部の横位に巡る数条の平行沈線文と、地文に縄文を施した上に、半截竹管による平行沈線が縦に垂下する手法は、縄文中期初頭に

比定されるものである。

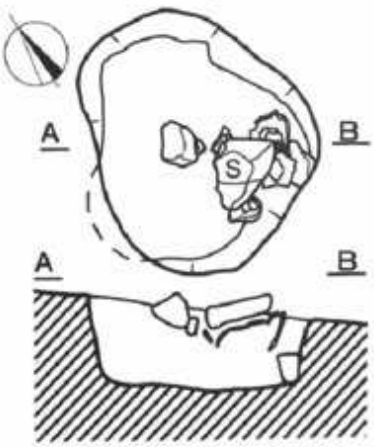
532P　BW－5グリッドで発見された。このグリッド付近は小竪穴が集中している。地形的に見ると、遺跡の東南隅にあたり、地山は急激に傾斜している。平面形は地山の礫のために凹凸が激しいが、底部は円形を呈しているところから不整円形と言える。断面は西側がやや袋状をなしているもののタライ状である。口径は東西105cm、南北110cm、底径75cm、深さは40cmを計測している。覆土は西側に暗褐色土、中心部には炭化物の多く入った黒褐色が底部まで入り、東側にわずかに褐色土が見られた。土層内には比較的大きい石塊から拳大の礫が多く入っていた。土器は南側の壁近く逆斜位の状態で出土した。この土器の文様は、口唇部に鋸歯状文、口縁に縄文を施し、そこにボタン状の凸起文も見られる。頸部には半截竹管文が一条まわり、肩部には縄文を地文にして、沈線による変形の渦文があり、その沈線のところどころに鋸歯状文が付されている。肩部の終わるところに沈線が周り、その下部にも鋸歯状文が付けられている。胴部には結節縄文が薄く付けられ、底部は張り出しが見られる。文様手法から縄文中期初頭に比定され、研究の好資料となろう。

第73図　532P　土器出土状態

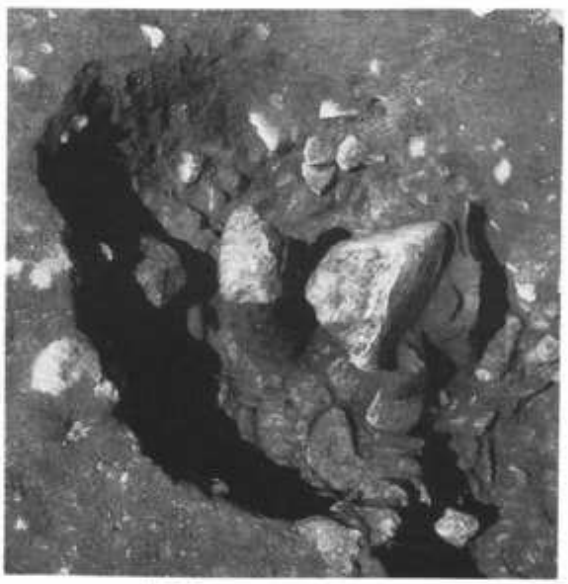


第74図　532P　平・断面図（1：30）

536P　BW・BX－5・6グリッドで発見された。先の532Pの北側にあり、小竪穴の集中している箇所である。4基が南北に並び、互いに切り合っているが、536Pは北側に位置して、535Pをわずかに切断して構築している。平面は不整楕円形、断面はタライ状を呈するが、西壁はやや袋状をなしている。口径は南北1m、東西90cm、深さは南北斜面に掘られているので、北壁は30cm、南壁20cmである。覆土の下部は褐色土、上層は黒褐色土で、それら土層に人頭大から拳大の礫が混在していた。土器の出土を見ると、南側の壁に近く、横位に置かれた上に、人頭大の礫によって押し潰されたと思われる状態であった。



第75図　536P　平・断面図（1：30）



第76図　536P　土器出土状態

出土した土器は底部を欠くが、器形は十分に窺える。胴部から口縁部に向け直線的に外傾する鉢で、口唇部に瘤状の突起がつけられている。文様を見ると、口縁部は縄文を地文とした上に、竹管によって縦位の沈線を引き、頸部には斜位の沈線が見られる。胴部以下には結節縄文を施しているが、文様の区画には横位に条線が引かれるなど、整然としている。器形、文様から中期初頭に比定されるものである。

545P　BX－11グリッドで発見された。小竪穴の東側半分は撹乱されている。平面は楕円形、断面はタライ状

をなすと思われる。残存する口径は南北70cm、深さは北側35cm、南側は20cmを計測するが、これは地山の斜面を掘っているためである。覆土は小礫混じりの黒褐色土が入り、特筆すべきことはない。土器の出土状態を見ると、地山のほぼ同じ面に3個の礫に囲まれるよう土器底部がやや斜位で出土した。土器の底径15.5cm、底部は強く張り出し、若干すり上げもしている。文様は粗い縄文が施されている。

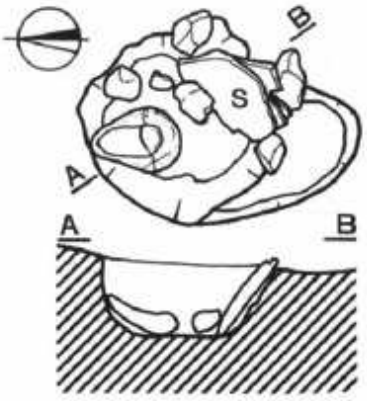
4．礫が入った小竪穴

本遺跡は既に述べているように地山層、表土層には多くの礫が含まれており、それらが小竪穴内に入り込むことは当然考えられる。そこで、それらの礫が、人為的に入られたと思われる例を取り上げたい。

454P　BK－12･13グリッドで発見された。この地点は小竪穴群の南側の端にあたる位置にある。平面は若干の凹凸を見るが楕円形で、断面は漏斗状と言える。口径は南北82cm、東西70cm、深さは34cmを計測する。小竪穴の中央の東北よりに人頭大の礫を中心に置いているが、それを安定させるために地山まで、それに合わせるように掘り窪めている。さらにより安定させるために幾つかの礫を押えにし、隙間には小礫も入れてあり、これらの中に凹石も見られた。覆土は黒褐色土である。

478P　BU－9グリッドから発見されたのであるが、6号住居跡の北西隅の壁を切断して構築している。平面は楕円形、断面はタライ状と言える。北西壁は外反し、南側は外反が少ない。基底には地山の大石が2個露出して掘るのを中止している。口径の南北93cm、東西80cm、深さは北側25cm、南側は住居跡によって地山を削られているために8cmの差となっている。内部には人頭大から拳大の礫を詰めているが、その手法は無造作と言える。しかし、最上部に平板の石を置いている点に注意したい。覆土は黒色土である。

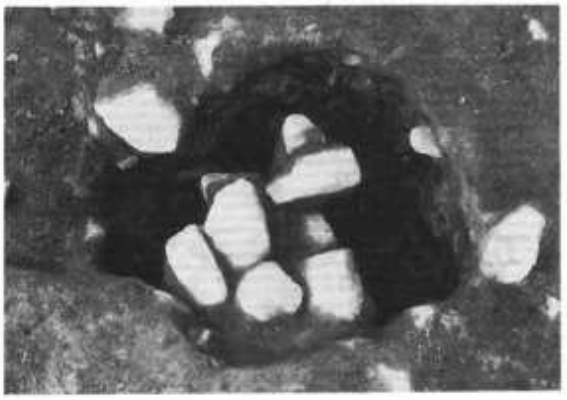
485P　BS－6グリッドで発見された。499Pによって南側を切断されているため全容をつかめない。平面は空豆形、断面は漏斗状を呈している。口径は長径94cm、短径は切断されているためにわからないが、60cm程度と思われる。深さは中心部で23cmと浅い。礫の出土状態から見ると、北西側の壁から比較的大きな礫3個を間隔をあけて置き、その空間に拳大の礫を詰めている。覆土は褐色を



第80図　563P　平・断面図（1：30）

第77図　545P　土器出土状態

第78図　562P　礫出土状態


第79図　579P　礫出土状態

第81図　563P　石皿出土状態

帯びた黒色土が入っていた。

562P　B－13グリッドで発見された。平面はほぼ円形、断面はタライ状を呈す。口径は83cm、深さは21cmと浅い。中央部よりやや東に大石が底部に接して置かれ、その西側に壁に接するまで、大小の礫は詰められている。遺物等の出土は特に見られなかった。

579P　B－13･14グリッドで発見された。平面はやや変形しているが円形で、断面は袋状をなしている。口径は60cm、深さ54cmを計測する。礫の置かれている状態を見ると、底より20cm上ったところにほぼ揃った礫を2段重ねている。この手法は454P・510Pに類似している。

（3）まとめ

今回の発掘調査で、住居跡1棟と、小竪穴155基が発見された。この報告では、住居跡と小竪穴内の遺物等についてを若干分類して、その概略を記した。昨年度に調査された分と合わせると、住居跡が6棟、小竪穴は589基の多さとなった。2回に及ぶ発掘調査によって、遺跡の推定範囲の3分の2程度が終了したと考えられる。その意味では集落構造や土器編年などを見る上で好資料となることは当然である。それに加えて、さらに中心となるものが、600基に及ぶ小竪穴である。これらは調査終了から日が浅く、現在各項目にわたって分類中であるが、それらの中から6号住居跡と小竪穴との関係を見ると、第一の特徴は住居跡周辺に集中していることである。仮に住居跡を中心に半径10mの円を描くと、今回発掘された小竪穴の大部分が、傘下に入り、住居跡のテリトリーの存在も考えられるなど、種々の問題が提起される遺跡である。

第82図　打製石斧・磨製石斧

第83図　536P　土器出土状態

第84図　536P　出土土器

第85図　石錘・石錐・装身具

第86図　凹石

第87図　477P　出土石棒

第88図　532P　出土土器